

皆さんは、日本語の「助長」という言葉、どのように使いますか？広辞苑には、①物事の成長・発展のために外から力を加えること、②急速に成長させようと思って、強いて力を添えてかえってこれを害すること。とありますが、短絡的な私は、「読んで字の如し」とばかりに、もっぱら①の意味で、(子供の)「科学に対する興味を助長する」とか、「我儘^{わがまま}を助長してはいけない」とか、事柄の良し悪しを考えずに使っていました。

ところが中国語の勉強を始めて、中国語の「助長」には良い意味が無いことを知り、目が点になりましたが、この故事成語を読んで、目から鱗が落ちた気持ちになりました。

この話は、儒家の經典となっている《孟子・公孫丑上》に出て来るお話です。昔、宋の国に一人の農夫がおりました。農作業に熱心に取り組んでいて、毎日自分の畑を見回っておりまして。ある時、ふと畑の作物の生長が遅いような気がしました。次の日も、またその次の日も、気をつけて見るのですが、成長しているようには見えません。隣の畑の作物は心なしか自分の畑のより成長が速いように見えました。

作物の成長を早めるにはどうしたら良いものかと暫く考えていましたが、急に素晴らしい考えを思い付き、手にしていた農具を畑の脇に置いて畑に入って行きました。それから彼は、畑の苗を一本ずつ少し引っ張って丈を高くしてやりました。畑一面の苗を全部伸ばすのは大変でしたが、夕方までにどうにかやり終えて、充実感と疲労感をこもごも感じながら家路につきました。

家に帰り着くと、家族に、今日一日自分がした仕事を自慢気に話しました。それを聞いた彼の息子は驚いて、畑を見に行きましたが、その時には、苗はもう皆枯れてしまって敵に横たわっていました。

《孟子》は、この話で「世の中の事物には何事も、発展の規則があるので、その段取りを無視して迅速な成長を求めると、却って事態を損なう」と教えています。つまり「助長」とは「手を加えて、物事を損なう」が元来の意味だったのです。

ところで、このお話の主人公はどうして宋人なのでしょうね。山田耕筰の「待ちぼうけ」で有名な、「守株待兎(shou zhu dai tu)」のお話も、主人公は宋人です。どうも昔の中国人は、宋人に対する偏見を持っていたように見えますがどんなものでしょうか？



イラスト：叶霖(Ye Lin)

こう考えた時に、「宋襄之仁(sòng xiāng zhī rén)」（宋襄の仁）という言葉が思い出しました。春秋時代の宋の襄公が、楚との戦いの折、宋よりも兵力の大きな楚の陣形が整わないうちに攻撃を仕掛けようと言う家臣の進言を聴かず、相手方の準備が整ってから戦って破れてしまったと言う、史実とされる話です。この言葉、日本で出版された所謂「四字熟語」の辞典には必ず載っていて、「不必要な情け」・「身の程をわきまえぬ振る舞い」などあまり良い意味には解釈されていませんね。こんなことから、宋人に対する評価が定着したのかと勝手に考えました。

ところが、この言葉、中国で出版された子供向けの「成語故詞」には載っていませんで、少し上級の「中国歴史故事精選」という本に「宋襄公“仁義”之師」として載っていました。その論調は、「宋の襄公の行いは、君子の特質である“仁”の心を実践したものである」というもので、「愚かな行い」どころか「君子に相応しい行い」と評価しているのです。さすが儒教の教えが浸透している中国だ、と思いました。と同時に、日中のこの相違はどこから来るのだろうかと考えさせられました。もしかしたら、日本も明治時代までは中国式に考えていたのではないのでしょうか。戦後になって、「競争相手を利するだけの“仁”は馬鹿げたもの」との解釈が出てきたのではないかと言うのが、正に「独断と偏見」による私の不敵な「解釈」です。